

「試練に打ち勝つイエス」(マタイ四・一〜一一)

1 信仰と試練

「主の祈り」に「われらをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ」という祈りがあります。「主の祈り」には口語体(讚美歌 93-5)もつくられていて「こころみ」は「誘惑」と訳されています。「わたしたちを誘惑から導き出して、悪からお救いください」となっています。

試み、誘惑、あるいは試練、こうした言葉で表されることを一度も経験しないで済むというような人はだれもいません。それゆえイエスは、「主の祈り」で、そうしたところに私どもが陥ることのないように、そうしたところから救ってくださいるように神に祈ることを命じたのです。

試みや誘惑、試練といったことに出会わない人はいないと申しました。とりわけ聖書に出てくる人物はみなそうでした。

一番に私どもが思い起こすのはアブラハムです。老年になってやっと与えられた独り子イサクを燔祭として献げるように彼は神に命じられます。その顛末はここでは触れませんが、聖書はこの出来事を「神はアブラハムを試された」(創世二二・一)と書いて、それが信仰の試練であったことを明らかにしています。アブラハムは過酷な神の命令の前に立たされたのです。

時代はくだってモーセと彼に率いられたイスラエルの民の四十年におよぶ荒れ野の旅路そのものが神の試練といってもよいものでした。食料もない、水もない、そうした荒れ野で、神の約束を信じ、神の掟に従うことを求められたのです。申命記八章にこうあります。

あなたの神、主が導かれたこの四十年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、すなわちご自身の戒めを守るかどうかを知ろうとされた(八・二)。

こうしてアブラハムにおいても、モーセと神の民イスラエルにあっても、試み、試練というのは、またその苦しみというのは、何か彼らの気の緩みから生じたもの、間違いを犯したために陥ったものではありませんでした。気を引き締めれば、すり抜けられるもの、克服することができるといふようなものではなかったのです。端的にそれは信仰への神の攻撃(ルター)なのです。

しかしその神の攻撃は信仰を奪ってしまおうとてなされるのではないことはいまでもありません。どうしてそんなことがあるでしょうか。使徒パウロがコリントの信徒への手紙^一で、神は「耐えられないような試練に遭わせることはなさらない」(一〇・一三)と語っているとおりです。むしろ神は、その愛する者に、愛すればこそ試練を与え、信仰を試し、「鍛錬」(ヘブライ一二章)し、その信仰から、不純なものや余計なものを取り除くことをなさるのである。これが聖書のメッセージ、それが聖書

における試みの、誘惑の、試練の真実です。

もちろんそうであるからといって試みを、試練を、甘く見たり、まして自分から欲するなどというのは正しくない。それはかえって神を試みることです。ですから私どもはいつも「われらをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ」と祈らなければならぬのです。

今日は「主の祈り」、すなわち私どもが祈るようにとイエスが教えてくださった祈りから話をはじめていますが、「主の祈り」は本来イエスご自身の祈りであってそれを私どもも祈ることが許された祈りです。「われらをこころみにあわせず、悪より救い出したまえ」と主イエスは祈っていた。私どもに先んじて試みがあるか、試練があるか知っていた、彼は、メシアとして、最後までその使命に、十字架の死に至るまで信実（忠実に）歩みとおそうとした。それゆえに試みを感じたり、試練の中に置かれていた。ですからイエスこそ「こころみにあわせず、悪より救い出したまえ」と祈りつづけたのです。

2 試されていたこと

この試み、この試練に、イエスをはじめて遭い、それを知ったのは、聖書が伝えるかぎり、メシアとしての自覚を深め、神の国の宣教に入っていくその直前のことでした。それが今日与えられている聖書箇所です。イエスがサタンの試みを受けるいきさつははじめのところでも明らかにされています。

さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、霊に導かれて荒れ野に行かれた。そして四十日間、昼も夜も断食した後、空腹を覚えられた（一〜二節）。

「霊に導かれて荒れ野に行かれた」とあります。荒野へと、試みられることへとイエスは自ら赴いたわけではありません。マルコによる福音書は「御霊がイエスを荒野に追いやった」（口語訳）と書いていますし、ルカには「荒野の中を霊によって引き回され」とあります。いずれもマタイより相当強い言葉です。

イエスが試みに遭うのは、イエスが洗礼を受けたことと関係があります。この直前に、イエスは、バプテスマのヨハネから洗礼を受けています（三・一六以下）。そのとき「神の霊が鳩のように御自分の上に下ってくる」のをイエス自身が目撃したとあります。それと同時に「これはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声は自分が何であるか、メシアの自覚をいつそう深くしたに違いありません。心の高ぶりを経験したと、恐れ多いけれど想像していいと思います。イエスの見た、鳩のように下ってきたこの「霊」が、いままたイエスを荒野へ、試みられることへと追いやったのです。

洗礼を受けることと試練に遭うこと、この二つのこととの関係、その消息を理解するのに私ども自身の洗礼のこと考えてもよいと思います。洗礼は私どもが神のものとき

れるということですが。神の子とされて歩みはじめたしるしです。しかし洗礼を受けたがゆえに、私どもはその辿りはじめた道を忠実に（信実に）歩んでいるか直ちに問われることになるのではないのでしょうか。キリスト者として、信仰者として歩みはじめたがゆえに、それまで以上に誘惑を感じたり、何事であれ試練として感じられたりもするのです。神の子イエスが、私ども以上に深く、その忠実（信実）さが試されたとしても不思議ではありません。

何をイエスはここで試されているのでしょうか。何がいまイエスに問われているのでしょうか。

それを、イエスの洗礼にまで返って考えてみれば、こうです。イエスの洗礼は、バプテスマのヨハネが自分があなたから受けるべきであって私があなたに授けるべきものではないとしてイエスに思いとどまらせようとしたものです（一四節）。ヨハネの洗礼は悔い改めの洗礼です。罪ある者の反省の洗礼です。神の子イエスはそれを必要としていない。それでもイエスがヨハネの洗礼を受けようとした、受けたのはなぜかといえば、神の子イエスが人の子として私ども罪人と同じところに立ち、私どもと同じ生を生きるためでした。人として神に対する真実の歩みを、私ども人間がアダム以来失敗したその歩みを生きるためでした。それこそがメシアであるイエスの歩むべき道にほかならないのです。神を唯一の神として、この神に従って歩むということ、歩みとおすこと、それが問われていた。その問いは最後までイエスにもなっていたと考えてよいと思います（マルコ八・三一〜三三、一四・三六）。それがイエスの試練であり、彼が試みられていたことです。

3 イエスの歩みと教会の歩み

いま申し上げたようなことを頭に置きながらサタンとの三つの問答を整理してみたと思います。

最初のサタンの問い、誘惑は、空腹の極限にあったイエスに、石がパンになるように命じたらどうだというものでした。「神の子なら」というのは、もし神の子であるならば、というのではなく、事実神の子なのだからという意味です。それに対してイエスはこう答えます。

「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」と書いてある（四節）。

二つ目は、神殿の屋根に立たせ、飛び降りてみるというのです。最初のイエスの答えが聖書の言葉（申命記）からだったからでしょうか、サタンも聖書（詩編）を引用し誘惑します。イエスの答えはここでも聖書（申命記）からです。

「あなたの神である主を試してはならない」とも書いてある（七節）。

三つ目は、高い山に連れて行き、そこからこの世の栄華を見せて、もしひれ伏してわたしを（少しでも）拝むなら、これをみなあげようというものです。イエスは、退け、サタンと鋭く言い放って、こう述べます。決定的な答えです。

「あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」と書いてある（二〇節）。

人間がアダム以来失敗した歩み、神を神とし、神に従って歩む、この人の道がイエスによって歩み直されます。それがメシアとしての歩みです。それは、第一の問答から明らかなように、人間のもろもろの欲求が、それを満たすものが、したがってパンが神ではないということです。神を神とするとはただ神の言葉によって、それを第一に生きるということです。

神を神として歩むということは、二つ目のやりとりでいえば、神を試みてはならないということです。試みることは、「心を見る」ことであり、それは神を信頼しないことでもあります。

三つ目、最後の対決によれば、神を神として歩むということは、神以外のもの、それが世と呼ばれようと、富と呼ばれようと、権力と呼ばれようと、神以外のいかなるものも神ではないし、また神としないということ、主なる神のみを拝し、主なる神のみに従うということです。イエスは第二のアダム（ローマ五章）としてこの道を歩み通して私どもに救いの道を開いてくださったのです。したがってこの道は私ども教会の歩むべき道でもあります。教会はここでのキリスト・イエスのように聖書を基として神の言葉から歩みます。神のみを神として、十戒の第一戒（出エジプト二〇・三）を告白して歩むのです。

ところでイエスはここでサタンの誘惑に打ち勝ったのでしょうか。勝利したのでしょうか。「そこで、悪魔は離れ去った・・・」（一一節）と書いてあります。一時離れたということですが。福音書を読み進めていくと、このサタンがイスカリオテのユダの中に入った（ヨハネ一三・二七）というような記述に出会います。サタンが決定的に打ち破られたのはイエスの十字架の死によってであり、その死の克服としての復活によつてです。

いずれにしてもイエスは勝利したのです。悪の勢力は打ち破られたのです。それに間違いはありません。それが信仰の現実です。しかし私どもはなお世にあつてさまざまの試練と苦しみの中にあることもたしかです。この地上を歩むかぎり誘惑から完全に自由になつてはいません。しかしイエスの開いた道が私どもの前にあります。また私どもには次のような聖書の約束の言葉もあります。「御自身、試練を受けて苦しまれたからこそ、試練を受けている人たちを助けることができになるのです」（ヘブライ二・一八）。それゆえ私どもは「われらをこころみにあわせず、悪より救い出たまえ」と祈りつつ、神を神としてあがめ、この方に従い、仕える道とともに歩んでいきたいと願うものです。

（二〇一九年三月一〇日）